

芥川龍之介「義仲論」考

——義仲の行方をも視野に入れ——

北村 倫子

はじめに

芥川の初期の代表作と言えば、まず我々は「羅生門」を想起する。実際、芥川は「羅生門」を自身の作家的出発点として意識していた。この作家の誕生を告げる「羅生門」に至る道程を明らかにするため、「羅生門」前に書かれた、言わば「羅生門」へと連なっていく作品を遡行する試みが、既に多くなされてきた。こうした中で、最近注目を集めているのが、中学生の芥川によって書かれた、「義仲論」である。

「義仲論」は、一九一〇（明43）年二月発行の『東京府立第三中学校学友会雑誌』第一五号に発表された、芥川満一七歳の時の作品である。表題の如く、源平の争乱の中、平氏を京都より駆逐したが、その横暴故に却って源氏に討たれた武将、木曾義仲こと源義仲について論じたものである。四〇〇字詰原稿用紙にして八〇枚に近い長編であり（注一）、広範な知識に支えられた内容、そして漢文脈で力強いたたなわれていく文章は、共に芥川の学力の高さを窺わせる。この作品は、一応史論としての体裁を整えている。しかし、（歴史家）芥川によって、史実の中の義仲は、新たな形象を持つことになった。芥川は、「義仲論」において、死すべき運命の下にある、力強い青年たる義仲を描く。己の死へと傾斜していく世界にあって、

義仲は内なる力を以て対抗していく。本稿では、義仲を死に至らしめんとするこの世界を、「作品世界」と呼ぶこととする。よって、「義仲論」は、死を終極とする作品世界と、その下にいる義仲との対立という構造を持っていると言うことができる。

本論文では、「義仲論」の持つ如上の構造の孕む意味、そして、このような構造の中にある義仲の位相を、当時の芥川の心情を探りながら、解き明かしていこうと思う。その上で、義仲がどこに向かおうとしているのか、より具体的に言うならば、「義仲論」から「羅生門」への見通しをも手に入れたい。ここには、青年芥川の作家への飛躍の秘密もまた、はらまれているはずである（注二）。

—

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、唯春の夜の夢の如し。我々周知の一文が冒頭に引かれた後、「義仲論」ではまず、平氏が滅亡へと傾いていくことが述べられる。平氏は富の快楽の中で剛健かつ粗野たる気概を失っていく。一方、人々の平氏に対する反感はやがて平氏打倒の鬱勃たる気運へと糾合されていく。また、入道相国清盛の専横は平氏政府の衰退をさらに助長するのである。一方、

源氏の人々の野心は、反平氏の氣運の勃々たるこの時に及び、いよいよ抑えがたいものとなってくる。そして、遂に「上は天の意に応じ、下は地の利を得たり」として源頼政が決起したことに、筆は至るのである。

以上の如くに時勢の推移を辿りつつ、芥川は「寧ろ当然の事となさざるを得ず」「元より是、必然の事のみ」「亦宜ならずとせず」「固より宜なり」などの語を要所に配していく。このことによつて、
へ寿永元曆の革命へへの移行、即ち、反平氏勢力の興隆と源氏の決起そして平氏の滅亡へと至らんとする歴史の流れの、必然性が強調されるのである。

のみならず、芥川は、こうした流れの延長線上にあるへ寿永元曆の革命への成就をも、既に見てしまっている。一篇の冒頭に平家物語の一節を引いた芥川は、「一」の始めにおいて、早くも「精神的革命は、既に冥黙の間に成就せられる也」と書き、へ寿永元曆の革命への成就が、これから繰り広げられる源平の争乱の帰結点であることを明示するのである。以後、「義仲論」を通じて、平氏の滅亡は要所要所において先取りされた形で言われていく。

是平氏が其運命の分水嶺より、歩一步を衰亡に向つて下せるものにあらずや。

平氏は、福原の遷都を、掉尾の飛躍として、（中略）円石を万仞の峯頭より転ずるが如く、刻々亡滅の深淵に向つて走りたりき。

しかも運命は飽く迄も平氏に無情なりき。（中略）見よ見よ西海の没落は刻々眉端に迫れる也。

そして、源氏に追い詰められた平氏が、最後の窮策と安徳天皇を奉じて西海に走ったことに筆が及ぶに、

平氏は、遂に、久しく予期せられたる没落の悲運に遭遇したり。

と記される。ここにおいて、この平氏の哀れな末路が、一篇の中で既に了解されてきた、平氏の没落ひいては滅亡そのものに他ならぬことが、改めて確認されるのである。

以上のように、「義仲論」においては、へ寿永元曆の革命への成就即ち平氏の滅亡という一つの帰結が、冒頭に既に明言されている。そして、平氏の衰退反平氏勢力の興隆から源氏の決起へと推移していく歴史の流れは、その帰結としての平氏滅亡が保証されているがゆえに、より強い必然性を以て把握されていくこととなるのである。作品世界は、このような必然性によって引き寄せられつつ、平氏滅亡の一点に向かって収斂していく。作品中の平氏反平氏双方の人々もまたその流れから外れない。彼等は、へ寿永元曆の革命への成就への流れの下にその行動を規定されており、この流れから逸脱することは決してない。既に見られている帰結へと向かう作品世界の中で、その流れに従うものとして、各人は描き出されていくのである。

このような作品世界と作品中の人物との間に存する密接な関係を確認した上で、主人公である木曾義仲について見ていきたい。

義仲は、父源義賢が悪源太義平に殺されたために、木曾の中三権頭兼遠に預けられた。そして、木曾の険しい地勢と、雄心勃勃たる老将兼遠の養育とによつて、義仲は、「其一代の風雲を捲き起せるの壮心、其真率自ら忍ぶ能はざるの血性、其火の如くなる功名心」を胸に漲らせる青年へと成長していく。芥川は、義仲の胸腔に溢れるこの激情を、そのまま平氏打倒という目的へと差し向ける。こうして、義仲は、打倒平氏の精神にひたすら燃え上がる青年として完成されていったのである。

このような義仲の激情は、彼の内においては、へ赤誠として結晶せられる。「彼は唯一の赤誠を有す。（略）彼が彼たる所以、唯此一点の靈火を以て全心を把持する故たらずとせむや」と芥川は述

べる。へ此一点の靈火へたるへ赤誠へが、先に挙げたへ壮心へへ血性へへ功名心へへ対応することは明らかである。へ唯一の赤誠へとは、義仲のへ全心を把持するへものとして、これらの激情の一点に集約したところにある。芥川は、義仲の有するのはへ唯一の赤誠へのみであると断ずることによって、義仲の実質をこのへ赤誠へ一つに限定するのである。

こうして、義仲は可及的単純な人間として造形されている。義仲は、勃々として内から発する力であるへ赤誠へしか持たない。このことは、彼の意識までもがへ赤誠へに一元化されていることを意味すると共に、また、へ赤誠へと義仲とが、完全に重なり合うことも意味する。よって、この鬱勃として噴出の機を求めて止まぬへ赤誠へは、義仲の上において、直ちに行動となって実現していくこととなるのである。義仲は、唯一の内部衝迫であるへ赤誠へに、突き動かされていく。ゆえに、義仲は、およそありうるかぎりの行動の人となった。芥川は、へ赤誠への澎湃として湧き出ずるままに、ひたすらに行動へと身を投じていく人間として、義仲を造形したのである（注三）。

「義仲論」前半即ちへ寿永元暦の革命への成就までにおいては、平氏打倒という方向性を与えられた義仲のへ赤誠へは、平氏打倒へと向かう歴史の流れにおいて、鮮やかに実現されていく。義仲は、二七歳にして挙兵し、破竹の勢いで平氏の軍勢を破り、平氏を京都から駆逐した末に入洛する。ここに、「寿永の革命はかくして彼が凱歌の下に其局を結びたり」として、冒頭より既に前提とされていたへ寿永元暦の革命への成就が言われるのである。

以上義仲の造形及び活躍を見てきた我々は、一篇を支配するへ寿永元暦の革命への成就へと至る歴史の流れと、義仲が戦いを通してへ寿永元暦の革命への局を結ばしめたこととの一致に気づく。義仲

の行動が時代を築いていき、そして彼は歴史の上を跳梁していく。この義仲の輝かしさは、義仲が次第に追い詰められ遂に果てていった入洛後においては、やがて悲壮さへと変質していく。その過程で、先の一致は、歴史の必然の流れの下にあることから逃れられぬ義仲と、なさんかぎりの行動によって自らの人生を築いていった義仲との間の、ある不整合の感をも抱かせるものとなっていくのである。

入洛前は目覚ましい功績を上げた義仲であったが、入洛後は、京都で暴行略奪を繰返し、人心は彼から離れていく。そして、後白河院が義仲追討に乗り出すと、義仲は法住寺を襲い後白河院を押し込めるといふ暴挙をなすに至る。

ここにおいて、へ寿永革命への成就即ち平氏の滅亡において見られた先取り表現が、再び繰り返される。

然り、彼は成功と共に失敗を得たり。彼が粟津の敗死は既に彼が、懸軍長駆、白旗をひるがへして洛陽に入れるの日に兆したり。

革命軍の将星は、秋風と共に、地に落つるの近きに迫り来れり。彼が滅亡は漸く一弾指の間に迫り来れり。

そして、義仲はこの予言された結末に従って、粟津に敗死していったのである。こうして、先に確認した、既に見られている帰結への流れの下に、各人の動向は定められているという命題が、今度は運命といった性格を帯びて、義仲に重くのしかかってくるのである。作品世界は死を終極として義仲に迫ってくるが、しかし、義仲の奮迅は、入洛後においても、とどまるところを知らない。むしろ、義仲の死へと傾斜していく文脈の中で、自らのへ赤誠への突き動かすままにひたすらに戦いへと身を投じていく義仲の姿は、いよいよ鮮やかなものとなっていく。

彼は常に自ら願て疾しき所あらざりき。彼は自ら甘ぜむが為に

は如何なる事をも忌避するものにはあらざりき。彼は不臣の暴行を敢てしたり。然れども、彼が自我の流露に任せて得むと欲するを得、為さむと欲するを為せる、公々然として其間何等の粉黛の存するを許さざりき。

芥川は、京都で狼藉を繰り返したのも、後白河院に弓を引いたのも、そして結局形として反逆の道を歩むことになったのも、義仲があくまで「赤誠」に忠実であつたためであるとする。彼の「赤誠」は戦いという形で現れる。義仲は、逃げる道も降伏する道も選ばず、ただ戦いに身を投じ、遂に戦いの中にその最期を迎える。こうして、義仲の「赤誠」は、死に至る運命の中であつて、なお実現していく。義仲は、戦い続けることによって、自らの生涯を、その終極に至るまで、自らの「赤誠」において律しきつたのである。

作品世界の側では、義仲の運命は、既に明らかなものであり、彼はそれに従つて敗死していった。しかし、その義仲の死に向かつていった生きざまとは、彼によって選ばれたものであり、彼の人生とは、戦いを通して彼自身によって切り開かれていったものである。よつて、ここに、義仲は定められた運命に従つたという命題と、義仲は自らの生涯を構築し遂げたという命題とが、提示されたこととなる。そして、この二つの命題は、等しく義仲の上言われるものながら、両立しえないもののように思われる。芥川は、片眼に義仲の運命を見据えつつ、なおも、「赤誠」に突き動かされる行動の人義仲を描いたのであつた。作品のはらむこのような構造とは、また、このような構造の中にあつての義仲の位相とは、どのように理解すべきものなのであろうか。

二

ここで視点を転じ、生身の芥川により近い人物を、彼の作品の中

に求めていきたい。

「義仲論」の発表された年、即ち一九一〇（明43）年に書かれたと想定される習作（注四）に、「死相」がある。

「自分」は、占者に、日蝕の日に向日葵が散りつくすと「若い命が亡ぶのぢや」と、自らの死を予言される。そこで「自分」は、花が散らないようにと向日葵に水をやっては、空を見上げる。赤い日は、毎日、東から西へとめぐっていき、東から西へと向日葵の黄色い花は頭をめぐらしていく。「自分」はそれをただ下から眺めるのみであつた。

そして、ついにその時は訪れる。日蝕がはじまつたのである。

その中に、ある日まつ赤な日が空のたゞ中へ来ると、暗い影が、その右の端にやどりはじめた。自分は息をとめて、その影が蟻のはふやうに、日のおもてを往くのを眺めた。暗い色がひろがるにつれて、空が夕方のやうにうす暗くなつて往つた。

さうすると、西からも東からも、南からも、北からも、——黒い鳥が、木の葉のふるやうに、日のめぐりに集つて来た。黒い鳥は大きな輪を描いて、嬉しさうにないた。——それが皆、鳥であつた。

だんだん暗くなつていく空の下、向日葵の花びらの散っていくのを数えながら、「——自分は死ななければ、ならない」。

今野哲氏は、「作品世界は『自分』の死に向かつて傾斜していくが、そのような個人的な進退のみならず、世界一切の亡びという様相をも帯びているのである」（注五）と指摘する。作品世界は、日のめぐるごとに、着実に死の時へと近づいていく。「自分」はその時がいつか来ることは知っている。が、その時がいつであるかは分からない。ともかくも、「自分」は死から免れんとして、空を見上げつつ、自らの命のあかしである向日葵に水をやりつつける。しかし、

彼のこころみは、何らの結果をも生み出さない。死を終極とする作品世界は、絶対的無へと向かうその過程において、すべてを無と化していく。死へと向かう作品世界の下にある以上、〈自分〉もまた作品世界と共に死ぬ運命を担わざるを得ない。死に至る運命の下に、〈自分〉は、己の無力でしかありえないことを確認していくのみである。

作品世界は徐々に死の影を帯びて次第にその重みを増していく。その下に〈自分〉はなすすべもなく押しつぶされていく。「死相」の世界は、死に領略されていく世界であるとともに、〈自分〉の無力感の充ちていく世界でもある。一編は、〈自分〉からの視点によって把持されている。この地上にとどまり天を見上げる視点は、運命の不可解と、死の時の近づいてくるのを知りつつも何もなしえぬ切迫感とに、「死相」の世界を満たしていく。〈自分〉の行きつくはての死はまた、〈自分〉の無力のきわまる地点である。さらに言えば、「——自分は死ななければ、ならない」と呟く〈自分〉は、己の無力ゆえに作品世界に殺されるのである。

この「死相」の世界は、また青年芥川自身のそれでもあった。

前に大きな陥穽があつて、僕の通る道が唯一すぢ其陥穽にどうしてもおちなくてはならぬやうについてゐたとしたら、どんなだらう。すべての力もぬけてしまふぢやアないか。(注六)

〈陥穽〉という語は、「何をやつても同じ事だ、結局同じ運命がくるのだし、誰でも同じ運命にあふのだから」(注七)という死の意識へとつらなっていくものである。芥川は、死のゆえに「すべての力もぬけてしまふ」と言う。しかし、「死相」の世界の持つ二面性を見てきた我々は、死のゆえに自分は無力だとする芥川の言葉が、芥川の無力感そのものの謂いであることに気付く。芥川は、己の無力ゆえに死の意識におびえる。彼自身の無力感が、彼の周囲に、死

を終極として逼塞状況にある世界を現出せしめるのである。芥川は、死の運命の下にひろがる地平から逃れられぬ一人として、死の運命に対する〈自分〉の不条理と焦燥を共有するのであった。

芥川は、己の周囲に、死を終極とし、死がすべてを無と化していく世界を見る。行きつくはてにはただ死あるのみであり、その中であつては彼は無力でしかありえない。だが、それにも関わらず、彼はその世界になおあることを強いられるのである。この不条理の感覚は、やがて *Raison d'être* の問題へと収斂していくべきものではあるが、しかし、今は彼の見ている世界を見ている以上のものとして問おうとはしない。先の嘆息には、若くして既に運命に対するあきらめを観じねばならなかった己の悲劇に酔い、且つあきらめを観じせしめた己の聡明を呪う、青年の甘美な絶望が漂っている。少なくとも、晩年の生を賭した懊悩と同日に扱われるべきものではない。ここには、死の影を増していく空を仰ぎつつ、何もありえはしないと信じ独り嗟嘆する、若き芥川の姿がある。

三

己の無力を愁うる芥川の抱く、如上の「死相」的世界観を確認した上で、「義仲論」の構造と、この中にある義仲の位相について、改めて考えてみたい。

「義仲論」の作品世界も、「死相」のそれと同じように、義仲の死に向かつていくものであった。しかし、義仲の死は、〈自分〉のその如くに、ただ作品世界に押しつぶされたことを意味しない。義仲は、ひたすらに戦いに身を投ずることによって、自らの生涯をうちたてていく。確認になるが、義仲は〈赤誠〉に忠実であることによつて、ありうるかぎりの行動の人たることを保証されていた。このことはさらに、義仲がなしいるかぎり、自身の人生を切り開いて

いったことを保証する。ここに、一つの答えが明らかになる。即ち、義仲は、戦いを通し己の生涯を築き上げていくことを以て、運命として彼に落ちてくる作品世界に拮抗していったのである。これら双方の力の均衡する一線において、義仲の運命と義仲の行動とは一致していくのであった。

さらに言えば、死を終極とする運命にありながら、なおも戦いに身を投じたことによって、義仲は、自らの死をも獲得するに至る。義仲は、内発する力である「赤誠」を戦いに実現し、死を終極として彼に迫ってくる作品世界に拮抗していったはてに、作品世界の尽きる場所たる死の一点へと行き着いたのであった。そして、作品世界の圧する力と義仲の抗する力が、死において収斂された時、どちらの力にも傾かない中立的な一点がたちあらわれたのである。この時、義仲は死を獲得したのだという表現が生まれうる。

彼の赤誠は彼の生命也。彼は死に臨んで猶火の如き赤誠を抱き、火の如き赤誠は遂に彼をして其愛する北陸の健児と共に従容として死せしめたり。是実に死して猶生けるもの、彼の三十一年の生涯は是の如くにして始めて光榮あり、意義あり、雄大あり、生命ありと云ふべし。

結末に近づくにつれて、次第に昂りを見せてくる芥川の義仲賞賛は、義仲の死において頂点に至る。行動に生きたものの達成の輝かしさが、ここに頌美されるのである。「死相」の「自分」は、無力のうちに死に圧されていった。これに対して、義仲は、死の運命の下にあってなお、「赤誠」の突き動かすままにひたすら行動へと身を投ずることによって自らのあかしをうちたてていき、ついに死を獲得する。さらに芥川にひきつけて言えば、芥川は、無力でしかない「自分」を、芥川は己の生身を分けたものとして描いたのであった。だからこそ、「赤誠」という自身の力によって、彼の運命と彼

の人為とが切り結ぶ境涯にまで至った義仲を、芥川は称揚してやまないのである。入浴後、死の運命という文脈において、孤軍奮闘する義仲のいよいよ鮮やかに描かれることが、ここに了承される。戦いのはてに、死を獲得したことを以て、義仲は、芥川の賛美の対象としての完成を見るのであった。

四

「義仲論」一編において、芥川は死を獲得する義仲を高く謳い上げた。が、死の獲得という事実の持つ意味の重さを、「義仲論」を書く芥川が十分に理解していたとは思われない。即ち、死を以て終極する作品世界の下にあって、内から勃々として発する生のエネルギーを有し、これを実現させながらもしかし、死を獲得すること、以て終わらざるを得なかった義仲は、一面当時の芥川の意識の在所とその限界を物語ることもなっているのである。

以下確認になるが、「義仲論」は、死を終極とする作品世界と、その下にある力強い青年義仲との対立という構造を有する。そして、このような作品世界の設定と義仲の造形とが、それぞれ当時の芥川自身の無力感に因っていることは、「死相」との比較を経て既に明らかである。即ち、死へと傾いていく作品世界は、芥川の無力感そのものであり、また、力に溢れる義仲は、芥川のアンチテーゼとして措定された存在としてあった。

芥川は義仲に、彼の内から発する力である「赤誠」を付与する。そして、芥川によってその実質を「赤誠」一つに限定されたがゆえに、義仲は「赤誠」の突き動かすままに行動へと身を投じていくこととなる。顧みるに、「死相」の世界とは、死に侵されていく世界であるとともに、「自分」の無力感に満ちていく世界であった。さらに言えば、「自分」は、自らの無力のために、死を終極とする作

品世界に殺されるのであった。とすれば、戦いの中に自己を実現していく、無力ならざる義仲には、「死相」的世界を逆転させる可能性が、実は秘められていると言ってよい。〈赤誠〉とは、死を以て逼塞していく世界に代わって、生の拡大していく世界を開きうる力なのである。ここに、義仲は芥川のアンチテーゼとしてあるという意味がより鮮明になってくる。

〈赤誠〉を胸に漲らせる義仲の頭上には、義仲の死の運命が重く垂れこめている。「義仲論」の天蓋をなしているとも言うべきこの義仲の運命は、芥川の〈歴史家〉意識によって設定されたものである。芥川は「義仲論」を書いた当時、「将来は歴史家にならうと」(注八)考えていた。「義仲論」が一応史論という体裁を採っているところに、「義仲論」に対する芥川の執筆態度を見ることができると。しかし、このことは、一編の内容が歴史の事実にとどまっていることを意味しない。芥川は、歴史の流れにおける義仲の死の中に、単なる史実という意味を超えた、一箇の人間の運命を見た。義仲の死へと至る歴史を、「死相」の作品世界と同様のものとして、己の内に捉えなおしたのである。

このような認識の前提に、芥川自身の無力感があったことは既に明らかである。即ち、芥川の抱く無力の感によって、源平の争乱の歴史は、義仲を死に至らしめる運命として、新たな意味を持つこととなったのであった(注九)。「義仲論」が、史論と言いつつも、青年芥川の心情を色濃く写す一篇となっていることが、ここにおいて確認される。己の頭上に死を終極とする世界を見る芥川は、史実に義仲の死の運命の天蓋を見出し、これを「義仲論」の作品世界として設定する。そして、鬱勃たる〈赤誠〉を有する義仲を、己のアンチテーゼとして、この下に造形したのである。言うなれば、芥川は、無力の彼の見る、死を終極とする世界を、「義仲論」に再現し、

この中に一箇の人間の運命を封じたのであった。

義仲の死の獲得は、行動に生き、運命と人為との境界をわたっていったものの輝かしい達成として存するはずである。しかし、無力の感にある芥川の意識の内に、義仲の生涯が完結する時、義仲ゆえになしえた死の獲得は、義仲ゆえになしえた最も華麗な滅びへと、自ずからその内実を変じていく。義仲は戦いに〈赤誠〉を実現することによって、自らのあかしをうちたてていった。このことによつて、義仲は彼を無たらしめんとする死の運命に拮抗していく。さらに言えば、義仲は、〈赤誠〉によって死の運命と拮抗したその上に、死の運命の天蓋を打ち破りうる存在である。しかし、義仲の死は既に見られた帰結である。義仲はついにこの天蓋を打ち破るだけの形象を得なかった。義仲は死を以て尽きる天蓋を内からなぞっていく、そのはてに死を獲得するのであった。こうして、死を獲得すること、を以て終わらざるを得なかった、義仲の姿が、明らかに becoming になる。

芥川は、史実に借りて、義仲を、ひいては己の可能性を殺していく。義仲は、死の運命の天蓋を打破する可能性を持ちながらも、これを滅せられ、悲壮の美を体現させられる。死を獲得する義仲を芥川は賛美する。が、その内実とは、甘美な絶望に酔う芥川の、死を獲得することによって最も華麗な滅びを演じた義仲に対するものであった。こうして芥川は最も華麗に己をあきらめていく。あるいは、義仲の死を描く芥川には、己を己の手の内に殺していく快感さえあったかもしれない。

運命に拮抗していった末に死を獲得する義仲の生きざまは、後年の作品「英雄の器」(注一〇)のテーマに通じていくものである。この作品は、漢の高祖劉邦と覇を争った楚の霸王項羽の逸事を題材としている。烏江に追いつめられた項羽は、漢の大軍の前に「項羽を亡すものは天だ。人力の不足ではない。その証拠には、それだ

けの軍勢で必ず漢の軍を三度破つてみせる』」と言って、勝てる見込みのない戦いに身を投じ、遂に戦いの中で死んでいった。このことを部下から聞いた劉邦は、天と戦い、天命を知ってもお戦った項羽は「『だから英雄の器だったのさ』」と呟くのであった。

「義仲論」から八年後、芥川は項羽によって再び運命と人為とが切り結ぶ境涯に至ったものを描いた(注一一)。しかし、義仲と項羽とが、それぞれの作者たる二人の芥川において持つ意味は、異なると言わねばならない。即ち、「英雄の器」を執筆した年から翌年にかけては、芥川が作家として最も華々しい活躍をしていた時であった。「英雄の器」の前後には、「戯作三昧」と「地獄変」という傑作が生み出されている。これらの所謂芸術至上主義的な作品は、芸術家としての己の力を恃む芥川によって書かれたものである。よって、人為のきわたる遙かな穹窿を跳梁していく項羽は、芸術家としての芥川の自負において、項羽たらんことの憧憬と共に、語られたのであった。項羽を思う劉邦、そして芥川の視線は、悠々たる蒼天へと向けられている。

これに対して、義仲は、芥川の無力のなす天蓋の内、あり、う、かぎりの行動によって、な、し、う、る、か、ぎ、り、に、華、々、し、く、滅、び、て、い、っ、た、こ、とを以て、あきらめねばならぬと愁うる芥川にいくばくかの慰藉を与えるのである。換言すれば、義仲の死の獲得という事実の持つ意味の重さは、「英雄の器」ではじめて芥川自身のものとなる。「義仲論」が「英雄の器」と同様のテーマをはらみつつも、芥川において義仲がより動的な存在となりえない所以である。

義仲は、死の運命の天蓋を超えることが期待されながらも、ついに超えることを許されない。芥川の無力の意識の内に、その生涯を完結していくこととなるのである。死を終極とする世界を打ち破る力を義仲に与えつつも、死を獲得する義仲を甘美な絶望の中に描き

出すことによって、義仲に華麗な滅びを体現させたところに、当時の芥川の意識の在所とその限界を見ることができよう。

五

義仲は、鬱勃たる〈赤誠〉を持ちながらも、悲運の英雄としてのその生涯を終えた。しかし、このことは、義仲の命脈が完全に途絶えたことを、必ずしも意味していない。義仲の行方をここで見定めておくならば、「羅生門」(注一二)の下人にこれを見ることができよう。

「羅生門」もまた、「義仲論」と同様に、死を終極とする作品世界と、その下にある力強い青年との対立という構造を持っている。即ち、滅びゆく京都を覆っていく夕暮れの下に、一人の若い下人が造形されるのである。

「羅生門」の作品世界は、死へと刻々と傾斜していき、やがて訪れる夜の闇の中にすべてを葬りさる、「死相」的な作品世界である。そして、作品世界の終極する死の門としてそびえる、荒れ果てた羅生門の下に立つ下人は、内から発する荒々しい力、芥川の言葉を借りれば〈brutality〉(注一三)をその中に秘めている。下人は、やはり内発する烈しい力である〈赤誠〉を有する義仲と、同じ血脈にある存在であると言える。

そして、下人は、己の〈brutality〉を実現することによって、「羅生門」の死すべき作品世界を逆転させることとなる。羅生門の楼上で、生きる決意においてなした引剝の行為に、〈brutality〉を鮮やかに実現させた下人は、死の門たる羅生門を飛びだしていく。〈brutality〉に目覚めた下人によって、死を終極とする作品世界は打ち破られ、すべてを無たらしめる死の一点は、彼の生の拡大していく起点となったのであった。こうして、生を獲得した下人は、

京都の町に強盗を働きに急ぐのであった。

いささか乱暴な仮定ながら、一連の作品に見られる死を終極とする作品世界のなす天蓋を、芥川の意識の闕と見る時、この闕を内側から喰い破っていく形象を「羅生門」の下人に得たところに、作家芥川の誕生の秘密が隠されているものと思われる(注一四)。処女創作集(阿蘭陀書房、一九一七(大6)・五・二三)を『羅生門』と名付けた芥川は、「羅生門」を、己の作家的出発を告げる作品として強烈に意識していた。項羽の戦った(天)を芥川が作家として目指さんとする時、あるいは、芥川の描く人物が彼自身を超える形象を以て不可なる(天)を目指さんとする時、死の運命の天蓋を打ち破り生を獲得する下人がたちあらわれる。かつ、ここには、もはや無力ならざる芥川の姿も発見されるはずである。

死の運命の下にあって、死を獲得した義仲に残された可能性は、下人へと継承されていく。死の運命の天蓋を打ち破り、生を獲得した下人の頭上には、その極みのいずことも知れぬ悠々たる蒼天が広がっている。そして、下人のひたすらに駆けていく彼方には、遠く項羽の姿が望まれるのである。但し、「義仲論」を書く芥川に、項羽の跳梁していった遙かな穹窿の予感されるのは、まだ先のことである。

おわりに

一七歳の青年の作品である「義仲論」は、憂愁の中に淪む青年芥川によって書かれたものであると共に、作家芥川の誕生をも、既に用意するものとしてあった。

己の無力の感に捉われる芥川は、自身の周囲に、「死相」の世界、即ち、自らの可能性の滅せられていく、死を終極とする世界を見ていた。無力の中に殺されていく感覚に堪えない芥川は、「義仲論」

において、内発する力である(赤誠)を有する義仲を、自身のアンチテーゼとして造形する。死の運命の下にある義仲は、(赤誠)を戦いに実現することによって、自らのあかしをうちたてていく。こうして、己の上に落ちてくる死の運命に拮抗していったはてに、義仲は、ついに死を獲得するのであった。

死の獲得は、行動に生きたものの輝かしい達成たるはずである。しかし、この事実の孕むテーマの重さは、未だ芥川自身のものとなっていない。(赤誠)とは、言うなれば、無力の芥川の見る死を以て尽きる天蓋を、打ち破りうる力である。が、芥川は、史実に借りて設定した死の運命の天蓋の内に、死の獲得を以て終わらざるを得ない義仲の姿を描いたのであった。義仲の生涯が無力の芥川の内面で完結することを思う時、死を獲得した義仲の生きざまとは、芥川の甘美な絶望に彩られた、最も華麗なる滅びの体現となるのである。義仲の未だなしえなかったことは、「羅生門」の下人へと受け継がれていく。下人は、内なる(ubiquitous)に目覚めることによつて、死の運命の天蓋を打ち破り、生を獲得する。そして、下人の頭上には、項羽が人為のきわをわたっていった蒼天が広がるのである。ここに、義仲から下人、そして項羽へとつらなっていく、行動に生きたものの系譜を、見通すことができる。そして、この線上には、芥川自身の作家としての展開もまた、重なっていくのである。

注

注一 「義仲論」の資料・下書きノート・下書き原稿二〇枚及び本原稿七七枚

は、山梨県立文学館に寄贈されており、『芥川龍之介資料集 図版 2』

(山梨県立文学館、一九九三・一一)にてその実態を知ることができる。

注二 近年、芥川の作家的出発を徳富蘆花の講演である「謀叛論」(一九二一

(明44)・二・一、於第一高等學校)との関連から解こうとする見解が提出された(佐藤嗣男、「芥川文学と『謀叛論』——熊谷孝氏の『なぜ、いま、芥川文学か』を読む——」、「文学と教育」27、一九八四・二)。この動きの中で、関口安義氏は「義仲論」の中に「謀叛論」の強い影響を見る(「初期芥川龍之介の世界——自己解放の叫び——」、「民主文学」33、一九八五・四)。興味深い見解ではあるが、今はこれを措く。

注三 宮坂覺氏は、一元的なものとして造形されている義仲を、「西方の人」の「永遠に超えんとするもの」との関連の上に捉える。即ち、「永遠に超えんとするもの」は、Darwinに完全に支配されている、一元的な、単一志向にあるもので、義仲もまたそうだった位相にあった人物であるとすると(「芥川龍之介と二人の『英雄』——『義仲論』と『西方の人』を中心として——」(日本キリスト教文学会編、『遙かなるものへの憧憬』、笠間書院、一九八二・四)所収)。

注四 葛巻義敏氏によって、「死相」の書かれたのは、「中学の最高年級から高等学校の初年級まで」、即ち、一七歳か一八歳頃のことと推測されている。そして、しばしば言われるように、「死相」の内容や文体には、夏目漱石の「夢十夜」の「第一夜」の影響が考えられる。実際芥川は『漱石近什四篇』(春陽堂、一九一〇(明43)・五)に収録された「夢十夜」を愛読していたことが、書簡から窺える(山本喜喜司宛書簡、同・六・二二(年月推定)。よって、「死相」は、一九一〇年の五月以降に書かれたもの、即ち一八歳の時のものとする見解が妥当だろう。

注五 「芥川龍之介の初期習作群について——『死相』『義仲論』『老狂人』を中心に——」(『二松学舎大学人文論叢』45、一九九〇・一〇)

注六 山本喜喜司宛書簡(一九一一(明44、年次推定)・二一日)

注七 注六に同

注八 「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い——出世作を出すまで——」(『新潮』、一九一九(大8)・二)

注九 「義仲論」における「寿永元暦の革命」という言葉は、芥川が、「反平氏勢力の興隆、源氏の決起、そして平氏の滅亡」までの歴史の流れを、フランス革命になぞらえていることから生まれてきたものである。しかし、清水

康次氏や今野哲氏に指摘のあるように、源平の争乱はフランス革命のような市民革命とは質を異にするものである(清水康次、「『野性』の系譜」、『国語国文』58-2、一九八九・二/今野哲、前掲(注五)論文)。ここにも「義仲論」の世界が史実を離れたものであることを確認できよう。

注一〇 一九一八(大7)年一月、雑誌『人文』に発表。
注一一 項羽については、「義仲論」中で、「西楚の霸王」「重瞳將軍」などとして、義仲と重ね合わされる形で繰返し引用されている。優れた武将であり、秦を滅亡させる大功をなしながらも、自らの烈しい気性故に次第に追いつめられ、遂に自刎してはた悲運の人物である項羽は、義仲の姿と相通するところが大きい。「義仲論」を書く芥川の念頭には、項羽の凄烈な生きざまが上っていたことと思われる。

注一二 一九一五(大4)年一月、雑誌『帝国文学』に発表。なお、本稿において、「羅生門」とは、『帝国文学』に発表された初出稿を指すものとする。末尾の改変については今は触れない。

注一三 「羅生門」が、『今昔物語集』を典拠としていることは、周知の事実である。そして、後年芥川は『今昔物語鑑賞』(『日本文学講座 第六巻』、一九二七(昭2)・四)において、次のように述べている。

僕は前の話を批評するのに「美しい生ま々々しさ」と云ふ言葉を使った。美しいか美しくないかは暫く問はず、この「生ま々々しさ」は『今昔物語』の芸術的生命であると言つても差支へない。……(中略)……この生ま々々しさは、本朝の部には一層野蠻に輝いてゐる。一層野蠻に?——僕はやつと『今昔物語』の本来の面目を発見した。『今昔物語』の芸術的生命は生ま々々しさだけには終つてゐない。それは紅毛人の言葉を借りれば、Buntigkeit(野性)の美しさである。或は優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさである。

注一四 「義仲論」と「羅生門」とをつなぐ線上に、死の闇の深まりから夜明けへと至る場面設定を持つ、「青年と死と」(『新潮』、一九一四(大3)・九)や「全印度が……」(習作、一九一五頃)などを捉えることによって、「義仲論」から「羅生門」への展開を作品の上から検討していくことも可能であろう。